

青い梅の実

ことしも、庭の梅の木が、一杯に実をつけた。大きくて、まるっこい、青々とした、みごとな実である。梅干しをつくるのにちょうど頃合いなので、みんなに手伝ってもらって梅ちぎりをした。その時、梅ちぎりを手伝った人に H 子さんという 25 才になる女性がいた。教育者の娘で、小学、中学、高校を通じて優等の成績を続けた人であった。それだけに、自分自身に対しても、他の人びとに対しても、要求水準が高く、しかもそれが期待どおりに満たされないことに苦しんでいた。つまり彼女は、理想的女性であることを常に自分に要求すると同時に、他の人びとからも常に愛され、賞賛される女性でありたいと、願っていた。そういう人は、学校の優等生であった人などに多いが、みずから進んで愛することを忘れていたので、対人関係もまずくなり、自己嫌悪や親兄弟への憎悪などに支配され、自ら気がつかないうちに、地獄のような苦しみに陥ってゆくことになる。

私は、かご一杯の梅の実を見つめながら、H 子さんに言った。「梅の木は、春先には清楚な花を咲かせて、私どもの目を楽しませ、初夏には枝もたわむほどいっぱい実をつけて、食べさせてくれます。しかもそれに対して、梅の木がどんな賞賛や返礼を要求したでしょうか？

それに比べると、私ども人間というものは、大自然の大きな恵みにすっかりなれっこになってしまって、増長し、わがままになり、感謝を忘れて身勝手な要求ばかりしている、とは思いませんか。特に、近頃の若い人は、自ら苦勞して植物を育てるとか、人を愛するということは何もしないでいて、ただ多く与えられることばかりをむやみに要求しているようですね。それは、天地自然の道にさからった、恥ずべきことではないでしょうか。本当のしあわせは、愛されるよりも、愛することの中にあるのではないのでしょうか？」

ようやく、謙虚な心に目ざめる時節がきていたのであろう、私を見つめる H 子さんの目に、涙が一杯たまってきた。こぼれ落ちる涙をぬぐいもせず、彼女は何度もうなずいた。このとき、彼女の心に大自然の限りない恵みに対する感謝と、生きとし生けるものに対する愛が生まれたのである。私も目がしらが熱くなってきた。H 子さんは、その日の日記に、次のように書いている。

「今日ほど、先生のお話が胸に応えたことはなかった。私はこれまで何と、<人から好かれたい、愛されたい、よく思われたい、賞賛されたい>という、自己中心的な要求ばかりに、心をつかってきたことだろうか？これまでの私は、人から与えられることばかりを欲していて、こちらから人や物に愛情を与え、みずから進んで世話をし、育てようとしたことが一ぺんでもあったらどうか？それだけでなく、自分自身の本来性をそのままに認め、受け容れるということを知らず、別のものに作り変えようとあがいてきた。思えば、何と間違った生活であったらう。

梅の木は梅の木という本来性を立派に生かして、大きな実をたくさん実らせ、それを人びとに与えている。私も、自分の持って生まれた本来性を生かして、まわりの人びとや生きものに、何か役に立つものを与えつつ生きる以外に、生きようがないではないか。それが一番自然な、そして本当の生き方ではないだろうか。私は、今まで自分も、また他の人も、粗末に扱ってきたことを、ほんとうにすまないと感じています。」